

「主は生きておられる」(2) (ヨハネ20:11~18)

挽地茂男

2019.10.13 日本基督教団千歳丘教会

ディズニーランドで「ディズニー・イースター」と銘打って、イースターの催しをするようになって、今年で9年



目になります〔2013年は開園30周年、2018年は開園35周年と重なって休止〕。今年は、4月4日から6月2日までが、ディズニー・イースターの開催日となっています。約60日。かなり長いのです。クリスマスもバレンタイン・デーもハロウィン〔ちなみにディズニーハロウィンは2019年9月10日(火)~10月31日(木)〕も、キリスト教に起源を持っていますが、本来の意味は大方忘れられて、年中行事の一つのように慣習化しています。さてイースターはどうなりますか、少々興味のあるところです。

先週もヨハネ福音書から復活の物語を読んだのですが、今日は最初に、ヨハネ福音書における主イエスの復活顕現物語のアウトラインを見ておきましょう。先週読みました①20

章1-10節の「空の墓」の物語。そこでは、空虚な墓に走ってやって来て、残された亜麻布と頭の覆いを目にただけで、つまり復活の主イエスを見ずに信じる弟子が登場しました。「来て、見て、信じる」という、接近と観察と信仰のダイナミックな動きを、非常に抑制した書き方で表現していました。その次に今日読みます、②20章11-18節の「マグダラのマリアへの顕現」の物語です。墓の外に立って、イエスの亡骸がなくなっていることに、さらに失意を募らせて泣いているマリアに、復活の主イエスが現れます。そのあとの③20章19-23節の、ユダヤ人を恐れて、扉を閉ざし、部屋の中に引きこもってしまった弟子たちに、主イエスが現れます。その時、弟子のトマスはその場にいませんでした。主イエスはさらに、④20章24-29節では、そのト



マス（を含む弟子たち）に主イエスが現れます。そして21章に入ると、⑤21章1-14節では、ガリラヤ湖に漁に出かけた弟子たちに、主イエスはガリラヤ湖畔に現れて語りか



け、弟子たちのために主イエス自ら食卓を整えます。食事が終わると、⑥21章15－19節で、主イエスは、ペトロの召命を再確認して、「わたしの羊を飼いなさい」と問い、「わたしがあなたを愛していることはあなたがご存知です」とペトロが答えると、「わたしの羊を飼いなさい」とペトロの使命を明確にしています。そして⑦21章20－25節では、ペトロの最期に関して主イエスが言明します。20章からは、合計7つのエピソードが、主イエスの復活を物語ります。それぞれのエピソードが、主イエスの復活を前提として、信仰者としてどのように生きるべきかという示唆を含んでいます。

さて今日の物語です。マグダラのマリアは墓の外に立って泣いていました。愛するイエスは十字架で処刑されたものの、有力者であったアリマタヤのヨセフやニコデモの力で何とか簡略にはしたものの、しきたりに沿った葬りはできました。安息日が明けると彼女は、主イエスへの抑

えがたい追慕の念に駆られて―他の女たちと一緒に(2節「**わたしたち**」)―墓にやってきました。すると墓の入り口がポッカーと空いているではありませんか。何事かと思っ

て中をのぞきますと、納められたはずの主イエスの遺体がないのです。「誰かが主の体を運び去った」のだと彼女は思いました。彼女はペトロと主の愛された「愛弟子」に伝えます。「**主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません**」(v.2)。二人とも一大事とばかりに、墓に走ります。マリアも弟子たちの後を追います。先についた愛弟子は中をのぞきました。しかし、空の墓と、その中には主イエスの体をくるんでいた亜麻布とその頭を覆っていた布きれしか残っていませんでした。あとから到着したペトロは、それを見るとがっかりして、墓から帰って行きました。でも主イエスの愛された愛弟子は「信じた」、と聖書は伝えます。

何かを心に確信したようでしたがしかし、彼はまだ口を開こうとし



ません。何かを秘めているようです。弟子たちはそれぞれの思いを抱いて「家に帰って行」(v. 10) きました。

マリアは一人——今度はおそらく一人で(13節「婦人よ」[単数]「わたし」[単数])——そこに残されていました。再び見るその空の墓は、以前よりもいっそう空虚さをましているように思えます。マリアは、自分の人生にも、心にも、ポツカリと穴の空いたような喪失感に占領されて、涙が止まりません。泣きながらもう一度、墓の中に目をやりました。なんと言うことでしょうか。主「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた」のです(v. 12)。「一人は頭の方に、もう一人は足の方に座ってい」ます(v. 12)。体はこわばって何を言っているかわかりません。すると「天使たち」(v. 13) が語りかけるではありませんか。「婦人よ、なぜ泣いているのか」(v. 13)。何を答えていいのかわかりません。ただお弟子たちに



告げたのと同じ言葉を——「わたしたち」(複数)を「わたし」(単数)に変えて——そのまま繰り返すだけでした。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません」(v. 13)。



こう話していると、マリアは後ろに誰かの気配を感じたので振り向いて見る



と、その人も天使と同じように「婦人よ、なぜ泣いているのか」(v. 15) と訊きます。そしてさらに「だれを捜しているのか」(v. 15) と訊くのでした。その人がイエスであるのに、園丁だと思いこんだマリアは、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります」(v. 15) と問いただします。そして次の瞬間でした。それは懐かしいあの声でした。「マリア」。その声だけで、彼女の中に喜びがこみ上げてきます。自分の名前が呼ばれる。あの懐かしい声が自分の名を呼んでいるのです。その「マリア」と彼女

を呼ぶ声に、過去のすべての幸いが凝縮してくるようになります。少なくとも、彼女の心の中で何かが動き出したことだけは確かでした。

ポール・トゥルニエというクリスチャンの精神科医が書いた『なまえといのち——人格の誕生』という本の中で、人は名前を与えられ、その名が大切に呼ばれ続けるていくことによって、人格が誕生し、人格が作り上げられていくと語ります。その本の中に紹介されているエピソードがあります。少し悲しいエピソードですが、このようなエピソードです。ある少女が強姦されて妊娠します。精神科医として彼女と面談し、診察したトゥルニエは、少女の精神的苦痛も考えて墮胎もやむなしと判断します。そしてその少女を見送る間際に、もし「その赤ちゃんが生まれてくるとしたら、どんな名前にしたいと思う」と尋ねます。その名前が何であったか、思い出せません〔本は段ボールの箱のどこかにあるのですが〕。トゥルニエから名前を問われただけでしたが、その一言で彼女の内に思いがこ



み上げて、涙を流しながら、墮胎を思いとどまって出産を決意します。大変な決意です。名前を呼ぶ、そこに人格が顔をのぞかせるのです。「マリア。」主イエスは「マリア」と呼びかけます。「**羊飼いは羊の名を呼んで連れ出す**」(ヨハ10:3)とかつて言われたとおりでした。「**わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている**」(10:14)。「マリア」と呼ばただけで、その声の方に体が動きそうになります。「マリア」とい



う名前は、主イエスと彼女の出会いから今日に至るまでの歴史のすべてでした。

「マリア」という名前は、単なる区別を表す番号や識別標識ではありません。その名前とそれを呼ぶ声に、主イエスとマリアの歴史のすべてが宿っているのです。聖書によれば、神は全ての人の名を知り——聖書では名前は人格そのものですから——その名を大切に、そして親しく呼びかけておられる方なのです。人は自分の外から、つまり他者から名前を呼び掛けられて造られていく。

その根底には、人が神の像（かたち）として、すなわち神に応答するものとして神に創られ、常に神によって呼びかけられ、人を通して神に呼びかけられ、その神との応答の中で生きるものとして存在しているという事実があるのです。



「マリア」と呼びかけられて、彼女は「ラボニ」——ヘブライ語で…「先生」という意味（v. 16）——と振り向いて、その御足にすがりつき、もうどこへも行かせないように、抱きしめたいような衝動にかられます。すると、主はこう言われます。

「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから」(Μή μου ἄπτου, οὐπω γὰρ ἀναβέβηκα πρὸς τὸν πατέρα· v. 17 a)。マリアには、何のことかよく分かりません。わたしたちにもよく分かりません。主イエスへの思慕に駆られていたマリアがすがりつきたくなるのは当然でしょう。しかし主イエスは、主の復活の体に触ることを一般的に禁じられているのでないことは、弟子のトマスに復活したご自分の体を見せて「あなたの指をここ

に当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい」(20:27)と語っておられることから分かります。主イエスは「神の許から、肉体を取って地上に降ったロゴス（神の言）」としての務めから解放されて、今や自分がかつて出発した父の許に今帰ろうとしておられるのです。「すがりつく」という身体的な接触によって確かめられる、関係性の次元がもはや変換し始めているのです。主イエスを「見ずして信じる」という信仰の本来的なあり方の一歩手前の位置に立っているのです。主イエスに「すがりつく」ことは、主イエスによって開かれていく霊的な次元の誕生の出来事に干渉することなのです。主イエスはそれを禁じておられるのです。マリアは主イエスとの新しい関係の中に生きることが必要なのです。主を見ずして、主の言葉、主の命令、主が与える使命の中で生きると言うことなのです。必要なのは主イエスへの信頼の中で生きると言うことなのです。そこで主イエスはマリアに命じます。「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたし

の神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と」(v. 17b)。主イエスはマリアに、お弟子たち——主イエスは裏切った彼らを「**わたしの兄弟たち**」と呼んでおられる(v. 17)——への伝言を命じられます。主イエスの言葉がマリアの信仰と行動を促します。彼女は復活の証人なのです。そしてまた主イエスの言葉がわたしたちの内にあるとき、わたしたちも生き始め、動き始めるのです。



「“Boys be ambitious !”」(少年よ大志を抱け！)は、クラーク博士が札幌農学校を去っていく別れのときに学生たちに語った言葉でした。彼が学生たちと生活を共にしたのは、わずか8ヶ月でした。しかし、この8ヶ月の滞在期間に圧倒的な影響を残して日本を離れたのでした。その後、学生たちはクラークの精神を生き始めたのです。主イエスは「**わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへ**

わたしは上る」(v. 17)と言われます。今や別れの時なのです。マリアの中に惜別への思いと、主イエスの命じられた言葉が錯綜します。しかし今は、主の言葉に従って行動すべき時なのです。

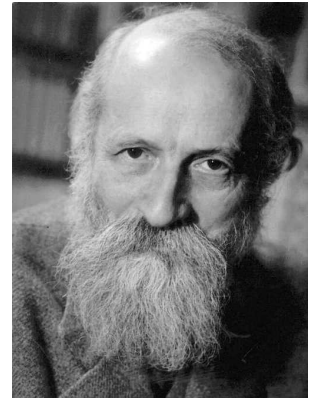


マリアは弟子たちの許に走ります。彼女は復活の証人なのです。走りながら、心は高鳴ってきます。あのポッカリと空いた穴に何かが満ちてきます。その感情をどう名付けていいかわかりません。喜びです。いや、希望です。いや、充実です。いや、幸せです。いや、生命です。いや、それらのすべてです。「**わたしは主を見ました**」(v. 18)。彼女の第一声でした。彼女はお弟子の許に走りながら、何度も繰り返したのは主の伝言だけではなかったでしょう。「イエスは生きておられる」と何度も、反芻するように、主イエスを見た自分の目確かめるように、繰り返したのです。「主イエスは生きておられる」。

これがキリスト教の根本のメッセージです。これにどんな説明や神学

的解説を加えても良いでしょう。しかしそれらは、所詮、説明や神学に過ぎないのです。この信仰の原石のようなメッセージがキリスト教の基なのです。このメッセージをめぐって、どんな物語が語られてもいいでしょう。しかしそれらは、所詮、物語なのです。このメッセージを基礎に、どんな祭やイベントが営まれても良いでしょう。しかしそれらは、所詮、祭やイベントに過ぎないのです。このメッセージにどんな反論が加えられ、撲滅運動が展開されてもいいでしょう。しかしそれらは、所詮、ただの反論や撲滅運動に過ぎないのです。このメッセージが嘘だと言っているに過ぎないのです。しかし、このメッセージを信じる者がいる限り、キリストと共に生きようとする人はこの世からは絶滅できないのです。それはこのメッセージが主イエスとの出会いを経験した人たちの証言だからです。それはやがて証言する人の証言を信じる、という「見ずに信じる」信仰へとつながっていくのです。そのメッセージが空虚にならないのは、それが過去の歴史について単なる報告ではなく、出会いを内実として、実のあるものとしてその出会いを再生産するからです。

マルチン・ブーバーという思想家は『我と汝』という本の中で、人は〈なんじ〉（あなたと呼べる存在）を持てば持つほど豊かになる、と申します。それはものをもつ豊かさとは、質的に異なります。そして〈なんじ〉（あなた）とは人はもちろん、自然や動物その他芸術品や様々なものをも含めて、その人の慈しむすべてのものが愛すべき〈なんじ〉となります。そしてついにブーバーは最後に〈永遠の汝〉つまり神をも含めて人は〈なんじ〉を持てば持つほど豊かになると語り、その意味で「すべての真の生とは出合いである」と言い切ります。そして人は、愛する相手の中に自分を注ぎ込み、その自分を注ぎ込む相手の中に自分を確かめ、自分が生きている実感を強めていくのです。多くの人々がマザー・テレサの働きを「善きサマリヤ人」のような隣人愛の模範として語ります。しかしテレサは、自分にとっては、それ



は単なる善行で終わるものではなく、「死にゆく人々」をとおして、実は神と触れあう時、神と出会う時だと語ります。「私の勇気を褒めてくださる人々に申しあげたいのは、私が、ハンセン病者の体に触れ、言いやうのない悪臭を放つ膿の流れる体に触れるたびに、聖体〔聖餐式〕でいただくキリストと同じキリストの体に触れているのだと確信なしには、その勇気はあり得ないということです。」キリスト教信仰とは、さまざまな出会いを通して、最終的には、神様との出会いと関わりの中に自分を見出していく過程なのです。

先週はお話しの終わりに、ヨハネの黙示録の言葉を読みました。その言葉は、人



々の心の扉を叩き続けるキリストを指し示します。ヨハネの黙示録 3 章 20 節。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたし
の声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」この言葉を絵にした有名な絵があることもお知

らせしました。夜、灯りがついた扉の前で、キリストがドアをノックしています。扉には取っ手（ドアノブ）がついていません。開けるのは、中に住む住人以外にありません。イエスは今もわたしたちの心の扉を叩いておられます。わたしたちが開くと、キリストは入ってきて、わたしたちと共に食事をすると言われるのです。主イエスとの親しい交わりが始まるのです。

松永希久夫先生は「出会いを再生産する書物としての福音書」を語りました。キリスト教の歴史とは、イエスとの出会いに生きた人々の歴史なのです。その歴史は、「見ないで信じる」人々の連鎖の中で起きる出会いの再生産によって支えられてきたのです。ペトロの手紙—1 章 8—9 節を読んで終わります。「1:8 あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。1:9 それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」

2017.4.23 日本基督教団千歳丘教会

2019.10.13 日本基督教団千歳丘教会

20:1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

20:2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

20:3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。

20:4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。

20:5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。

20:6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

20:7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。

20:8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。

20:9 イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖

書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

20:10 それから、この弟子たちは家に帰って行った。

20:11 マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、

20:12 イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。

20:13 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

20:14 こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。

20:15 イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

20:16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」

という意味である。

20:17 イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」

20:18 マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

20:1 Τῇ δὲ μιᾷ τῶν σαββάτων Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ ἔρχεται πρῶτ' σκοτίας ἔτι οὔσης εἰς τὸ μνημεῖον καὶ βλέπει τὸν λίθον ῥημένον ἐκ τοῦ μνημείου.

20:2 τρέχει οὐκαὶ ἔρχεται πρὸς Σίμωνα Πέτρον καὶ πρὸς τὸν ἄλλον μαθητὴν ὃν ἐφίλει ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγει αὐτοῖς, Ὑπνῶν τὸν κύριον ἐκ τοῦ μνημείου, καὶ οὐκ οἶδαμεν ποῦ ἔθηκαν αὐτόν.

20:3 Ἐξῆλθεν οὖν ὁ Πέτρος καὶ ὁ ἄλλος μαθητής, καὶ ἦρχοντο εἰς τὸ μνημεῖον.

20:4 ἔτρεχον δὲ οἱ δύο ὁμοῦ· καὶ ὁ ἄλλος μαθητής προέδραμεν τάχιον τοῦ Πέτρου καὶ ἦλθεν πρῶτος εἰς τὸ

μνημεῖον,

20:5 καὶ παρακύψας βλέπει κείμενα τὰ ὀθόνια, οὐ μέντοι εἰσῆλθεν.

20:6 ἔρχεται οὖν καὶ Σίμων Πέτρος ἀκολουθῶν αὐτῷ καὶ εἰσῆλθεν εἰς τὸ μνημεῖον, καὶ θεωρεῖ τὰ ὀθόνια κείμενα,

20:7 καὶ τὸ σουδάριον, ὃ ἦν ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ, οὐ μετὰ τῶν ὀθονίων κείμενον ἀλλὰ χωρὶς ἐντετυλιγμένον εἰς ἓνα τόπον.

20:8 τότε οὖν εἰσῆλθεν καὶ ὁ ἄλλος μαθητής ὁ ἐλθὼν πρῶτος εἰς τὸ μνημεῖον καὶ εἶδεν καὶ ἐπίστευσεν·

20:9 οὐδέπω γὰρ ᾔδεισαν τὴν γραφὴν ὅτι δεῖ αὐτὸν ἐκ νεκρῶν ἀναστῆναι.

20:10 ἀπήλθον οὖν πάλιν πρὸς αὐτοὺς οἱ μαθηταί.

20:11 Μαρία δὲ εἰστήκει πρὸς τῷ μνημείῳ ἔξω κλαίονσα. ὥς οὐέκλαιεν, παρέκυψεν εἰς τὸ μνημεῖον

20:12 καὶ θεωρεῖ δύο ἀγγέλους ἐν λευκοῖς καθεζομένους, ἓνα πρὸς τῇ κεφαλῇ καὶ ἓνα πρὸς τοῖς ποσίν, ὅπου ἔκειτο τὸ σῶμα τοῦ Ἰησοῦ.

20:13 καὶ λέγουσιν αὐτῇ ἐκεῖνοι, Γύναι, τί κλαίεις; λέγει αὐτοῖς ὅτι Ὑπνῶν τὸν κύριόν μου, καὶ οὐκ οἶποῦ ἔθηκαν αὐτόν.

20:14 ταῦτα εἰποῦσα ἐστράφη εἰς τὰ

ὀπίσω, καὶ θεωρεῖ τὸν Ἰησοῦν
ἐστῶτα, καὶ οὐκ ᾔδει ὅτι Ἰησοῦς
ἐστιν.

20·15 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς, Γύναι, τί
κλαίεις; τίνα ζητεῖς; ἐκείνη δοκοῦσα
ὅτι ὁ κηπουρός ἐστιν λέγει αὐτῷ,
Κύριε, εἰ σὺ ἐβάστασας αὐτόν, εἰπέ
μοι ποῦ ἔθηκας αὐτόν, καὶ γὰρ αὐτόν
ἀρῶ.

20·16 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς, Μαριάμ.
στραφεῖσα ἐκείνη λέγει αὐτῷ
Ἑβραϊστί, Ῥαββουνι (ὃ λέγεται
Διδάσκαλε).

20·17 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς, Μὴ μου
ἅπτου, οὐπω γὰρ ἀναβέβηκα πρὸς τὸν
πατέρα· πορεύου δὲ πρὸς τοὺς
ἀδελφούς μου καὶ εἰπὲ αὐτοῖς,
Ἀναβαίνω πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ
πατέρα ὑμῶν καὶ θεόν μου καὶ θεὸν
ὑμῶν.

20·18 ἔρχεται Μαριάμ ἡ Μαγδαληνὴ
ἀγγέλλουσα τοῖς μαθηταῖς ὅτι
Ἐώρακα τὸν κύριον, καὶ ταῦτα
εἰαυτῇ.